

# パリ泥棒事情



帯広市医師会  
国立病院機構帯広病院

菊池洋一

あまり齢を取らないうちに行っといたほうがいいよ、と知人に言われ、思い切ってヨーロッパへ旅行に行くことにした。ヨーロッパといったらやっぱりパリだよ、いやいやイタリアだよ、と喧々譁々したあげく、結局フランスに決まった。

花の都パリ、年間2,000万人以上が観光に訪れる国。世界中に知られた美術品の数々。北はノルマンディー、モン・サン=ミシェル、ロワール古城などなど。一通り観光コースは周った。しかし、最も強烈な印象に残ったのは、パリ・オペラ座の入口付近で遭遇した“追いはぎ”だ。確かに混雑していたし、追いはぎ多発地帯として知られる場所だった。私たちが入口に近づいた時に、突然私の目の前に新聞紙の束が現れ、目の前でバサバサと揺れ始めた。初めは物売りかと思い、ノーと叫んで振り解こうとしたがいっこうに止まらない。そうしているうちに、その新聞紙の束は私の顔にますます近づき、激しくバサバサと振られた。そのうちにあちこちから私の体に手が伸びてきた。私は何が何だか分からなかったが、とにかく身の危険を感じ、体をひねってその手を振りほどいた。それとほぼ同時に私とその手の間に誰かの体が割り込んできた。振り向いてバッグを見ると、ファスナーがみごとに開けられていた。幸い財布やパスポートなどは体の中にベルトで隠していたし、バッグには観光のための本しか入っていませんでしたので、何も取られはしなかった。割り込んできたのは男性二人で、一人は老人、一人は若い男で、私はそのフランス人男性二人に救出された訳だ。泥棒としてはいったん仕掛けた以上、失敗は許されない。あの中国人が日本人のバッグには財布が現金、パスポートが入っているに違いない、と踏んだのだろう。それが何も無いものだから、何とか身ぐるみはがそうと手を伸ばしたらしい。

フランスの泥棒情報はすでに日本の空港でしつこくくらい添乗員から説明があったので、情報としては知っていた。それがリアルさを増したのは、行き飛行機の中でフランス人とのハーフと思しきキャビンアテンダントの話を聞いた時だ。フランス人客ともペラペラとフランス語を話していたそのキャビンアテンダントは、今までパリの地下鉄で二度iPhoneをひったくられたという。地下鉄の車両のドア付近で携帯をいじる姿は日本ではよく見掛ける

が、駅に停車してドアが開くと、出発間際にドアが閉まる直前にその携帯をひったくって、泥棒はそのまま降りて逃げてしまうらしい。決してドア付近にいないほうがいい、というのがそのキャビンアテンダントが教えてくれたことだった。家内と二人地下鉄で移動するときは奥の方に行こうと思って車両に乗ったが、結局は無理だった。今時、と思うかもしれないが、パリの地下鉄はボックス席で四人が向かい合わせで座る。通路は狭く、席が埋まっているときはドア付近にいるしかない。

こういった泥棒たちはおおむね、昔ジブシーと呼ばれた流浪の民だという。今はジブシーという表現は差別用語だそうで、ロマと呼ばれる人々だ。ルーマニアなどの東欧やイタリアから流入しているらしい。もともとはパキスタンあたりにその源流があるらしいが、スペインではフラメンコなど独自の文化を作った。この人たちについては、警察ではある程度、実態を把握しているということだが、人種差別という抗議を受けるのを恐れて積極的に取り締まっていない。多民族都市らしい対応だ。過去の話になったかもしれないが、エールフランスに乗ると荷物がなくなる、と言われた。まさに、泥棒天国だ。さすがに、近々政府が本腰を入れるらしいが、どうなることやら。観光大国にしてはお粗末な話だ。話は飛ぶかもしれないが、フランスの柔道人口は日本よりはるかに多いそうだが、単純に日本にあこがれるジャポニズムだけでは説明できないのではないかな。護身術はもはや現代社会においては教養の一つなのかもしれない。

日本という国は安全だ。身の危険など感じることは人によっては一生ないのではないかな。しかし、日本はこれから超高齢化社会を迎え、やがて人口が大きく減少する。人々は都市に集中し、やがて経済的には他の国との都市間競争が始まるという。いろいろな国からの情報を得るためには国内にいろんな人種を抱えている方が有利だというが、治安の問題、宗教上の問題など解決しなくてはならない問題は山ほどある。あるいは人口の維持という観点からも、移民の問題はいずれまた議論の対象になるだろう。医療についても同様で、アジアの人々にもっと門戸を開放すべきだという意見もあるらしく、またそういった時代も来るかもしれない。そうなったときに、日本がもともと持っていた清潔で安全な社会との両立を何としても成し遂げてほしいものだ。いつまでもこの国が世界から安全な国だと言われ続ける国であってほしいと願わずにはいられない。